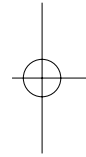
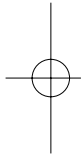
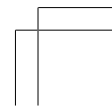
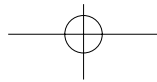
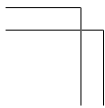


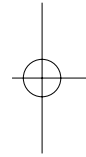
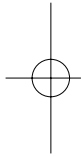
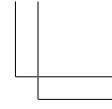
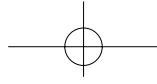
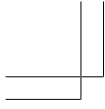
3

## Winter Episode

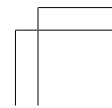
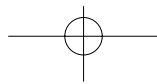
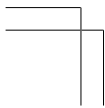


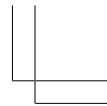
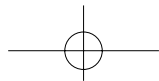
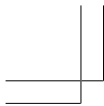
kifumido





本文：桐月  
表紙：オダワラハコネ





、  
目次

コンチエルトノート

天都夜行

Winter Episode

見上げた空におちていく

夏の推理ゲーム

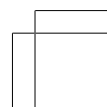
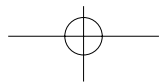
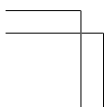
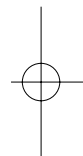
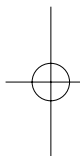
Summer Times

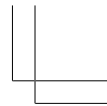
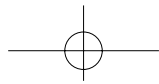
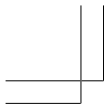
……9

……33

……69

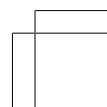
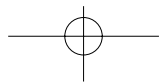
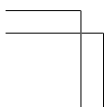
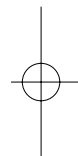
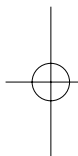
……101

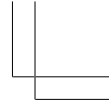
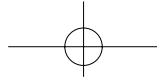
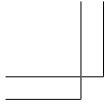




この作品はあつぶり製作である「コンチエルトノート」「見上げた空におちていく」の設定、世界観、キャラクターを使用した二次創作小説です。

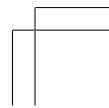
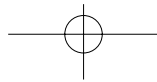
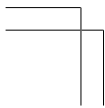
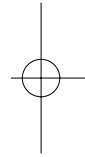
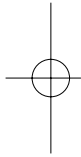
原作の企画、設定、担当シナリオは同じく桐月ですが、あくまでアンオフィシャルの同人誌であり、今後の展開において内容に齟齬が生じる可能性もあります。あくまで本作は本編のIFであることを明記いたします。

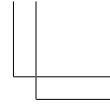
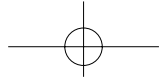
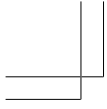




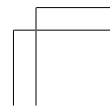
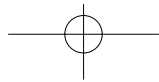
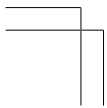
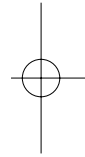
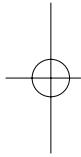
コンチェルトノート・見上げた空におちていく 短編集

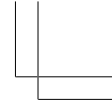
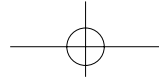
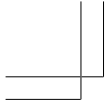
Winter Episode





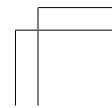
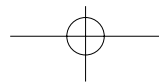
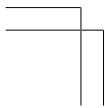
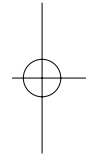
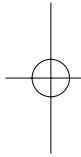
8





9

天都夜行  
-あまつやこう-



ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！  
手にしたカナヅチで板に釘を打ち付ける。  
四角に組み上げられた板は、立派な台へと姿を変えていた。  
「……こんなもんか」  
完成した台をチェック。  
どこにも異常もゆがみもない。  
倉上進矢は満足げに置いた。  
「終わりましたの？」  
クラスメートの南条麻里香が話しかけてくる。  
ここは2年A組の教室。  
そして今は、天都原学園の文化祭。通称『桜桐祭』の準備だ。  
しかし、彼が作っていたのは自らの出し物ではない。  
女子の割合が多く、文化部が主体のこの学園では、文化祭は部活動単位で行われる。  
教室はクジでそれぞれの部に割り当てられる。



学園の入り口のような目玉の場所は取りあいになるための措置だった。

「こんなモンでどうだ？ カウンターには十分だろ」

「……器用なものですわね」

組み立てられた台を見て、目を丸くする。

整った容貌をした少女だ。

良家の子女が多い天都原学園でも、上位に位置する南条家の一人娘。

気の強い彼女は、ともすれば敵も作りやすいが、潔癖を常とした気丈な性格は進矢は嫌いだ。ではなかった。

「後はもう一つか……。さっさと作っちゃまおう」

「よろしくお願いしますわ」

それだけ言って、自分の作業に戻っていく。

見事にセットされた頭のロールを指先でくるくるといじっている。

機嫌の良い時に見せるクセらしい。

「おい、南条」

「なんですの？」

「ちよっとこの板に穴あけて欲しいんだけど」

言いながら、ひよいと髪の毛の先を摘んだ。

「ガガガガ……って出来ませんわよっ!!」  
嘸み付くように自らの髪を奪い返す。

「やっばお前ノリいいよなー。わりーわりー」

「まったく……」

ふん、とそっぽを向く。

その足がピタリと止まり、ついと進矢に向けられた。

「そういえば倉土さん。聞いたことがあります？」

「何を？」

「……なんだか最近、出るんだそうです」

学園が終わる。

文化祭の準備は数日に渡って行われる。

今日は5月29日の木曜日。

明日の金曜日は、丸一日使った文化祭準備日だ。

月光館のロビーで、神風莉都に南条麻里香から聞いた話をした。

「幽霊……か」

ふむ、と考え込む。

「まあ似たようなモンがいるからな。あながち嘘とも言い切れなくて」

「なぜわれを見ながら言うか」

テーブルの上では、身長15cmほどの巫女服を着た少女が怒っている。

幸御魂のタマ。

進矢が部活の手伝いをしていた理由でもあり、彼のこれまでの不幸生活の原因の一つでもある。

彼女をはじめ、進矢や莉都は契約のような関係にある。

事故によって命を救われた。

幸運を前借りし、タマに負債を返す形で他者の幸運を集めている。

方法は三つ。

一つ目は他人の不運を肩代わりする。

二つ目は他人の幸運を剥奪する。

三つ目は他人との間に接点を作る。

昼間やっていた部活動の手伝いは三つ目に属し、また他者の近くに居る事で振りかぶる不運の肩代わりを目的としていた。

上げた順に効果が大きく、またどれをやるにしても、何かしらの繋がりが必要になる。

それは友愛であったり、憎しみであっても構わない。

他者との間に交わされる感情の流れ。

それらを道として、タマは相手の幸運を操作する。

だから必要なのは知名度と相手からの認識。

何か事件を解決して名が知られれば、それだけ現状を打破しやすくなる。

「でもでも、幽霊騒ぎなんて聞いたことないよ？」

同じクラスの今里和奏が疑問を上げる。

活発で明るい、クラスの人気者の少女だ。

彼女も進矢と同じく転校生で、時期は3ヶ月ほど早い。

今年の頭に天都原学園にやってきて、学年をまたいで僅か5ヶ月。

しかし、すっかりと馴染んでいた。

「そうだな。私も聞いたことがない。……というより、逆説的に珍しい話ではなくなっているからな」

「……聞いたことがないのに珍しくないのかよ」

「この時期ならなおさらだ。夜遅くまで居残りで作業している生徒が多いだろう？ 中には怪談などで暇を潰す者もいる」

「ははあ。そんな時に誰かのじょーだんを間に受けて、本当に出たーとか思っちゃったりとか」

「と、私は見ている」

「それで、知らないが珍しくも無い話か……」

本物は知らないが噂だけなら幾らでも沸いてくるわけだ。

「それで南条はなんと言っている？」

「さあ……今日は遅くまで設営するから、見つけたら退治するのかなんとか」

「うわ。麻里香ちゃんさすがだ……」

和奏がこわこわと言った。

暗いところが苦手な彼女には、気丈に言い切れる麻里香が信じられないらしい。

「それで？ どうするのだ」

「……ま、行くだけ行ってみるか。白雪と小夜璃さんには留守番をしてもらって……和奏さんはどうする？」

「う……」

「別に無理強いするつもりはないぞ。私と進矢だけでも十分だ」

「われも行くぞ」

「むしろ、俺とタマだけで十分……か？」

「なに。お前たちだけに押し付けるつもりはない」

「……う、うう。うう」

一拍おいて莉都が駄目押しに一言。

「それで、今里はどうするのだ？」

「ハメラれたあーっ！」

夜の校舎に今里和奏の絶叫が響いた。

「うるさいですわよ」

「だってだってだってええ。文化祭準備期間だし、人いっっぱいいるよーって言ってもん。全然いもないもんっ！ わたしたちただけだもんーっ」

「……そう言うこともある」

「してやったりみたいなの顔しないでよっ」

校舎は静まり返っている。

明日の夜になれば準備終了の前夜祭で盛り上がるらしいが、今日はひと気がまるでない。

「幽霊ってどこ出たんだ？」

「一階の理科準備室だそうですわ。遅くまで残っていた子が目撃したとか。その次が隣の国文科棟の教室。こちらもなになにやらしい人影があったとか」

「ふーん……」

ここにいるメンバーは進矢を除けば、神風莉都。今里和奏。それからタマの月光館メン

パー。外部の人間が南条麻里香のみ。

莉都が話をつけたから、警備員にそのまま出される事もない。

「まあ、さくっと回ってみるか？」

「そうですね。では手分けして——」

「嫌だよーっ！」

麻里香の提案に和奏が顔色を変える。

「ですが全員で歩いては意味がありません。何かで決めて二手に分かれましょうか」

「そーだな」

「う〜〜……じゃあ、がんばる」

グーパーで決める。

「……あら」

進矢と麻里香がグー。

莉都と和奏がパー。

これでペアが決定していた。

「……ま、よろしくな」

「こちらこそ」



薄暗い校内に足を踏み入れる。

二人の担当は理科準備室。標本や人体模型がある分、よりおどろおどろしくなっているだろう。

校舎の中は普段と違い、僅かな足音まで反響して流れていく。

「……ふうん」

そんな場所を、麻里香は臆した様子もなく進んでいく。

「女の子ってこういう所は苦手なイメージあるんだけどな」

「倉上さんの勝手な思い込みですわね」

「実際、和奏さんは暗いの怖がってたな」

「今里さんなら、そうなのでしょね」

「ま、南条の者が闇を恐れては話にならぬな」

進矢の肩の上で含み笑いを漏らす。

タマの声に、麻里香は気付いた様子はない。

彼女を知覚するには、幾つか条件がある。

進矢や莉都のように、直接的にタマと契約していること。

これは明確な文章ではなく、彼女から幸運を与えられている事がそれにあたる。

二つ目は、進矢らと強固な縁があること。

人の想いを媒介するタマは、それらを幸運の通り道として変動、操作する。

そのどちらにも無い麻里香には彼女を知覚することが出来ていない。

「……理科室だっけ。ざっと見て回ってみるか」

進矢の声に頷く。

二人は奥の闇へと歩き出した。

一通り校内を歩いたが、めぼしいものは何もなかった。

特に怪異が起こるわけでもなく、不審な人物が歩いているわけでもない。

半ば拍子抜けした気持ちで、進んでいく。

残るは最後。理科準備室だけだ。

「そういや、南条って何で陸上やってるんだ？」

「……いきなりなんですの。唐突に」

「いや、歩いているのも退屈だからさ。他に話題もねーしな」

「そうですわね……。それにしても、陸上ですか」

「特に意味はないのか？」

「……もしかしたら、そうなのかも知れません」

ぼつりと漏らす様子に、頭の上のタマまで首を傾げている。

「まあ、大昔の話です。ふと走る事とは何だろうと考えた事がありました」

「……ずいぶん哲学的だな。昔って子供の頃だろ？」

「確かに子供ですが……。そう大して珍しいとも思えませんわ。単に機会があっただけです」

「こほん、と咳払いをして続ける。

「私にはよく分かりませんでしたので、試してみようと思った次第です。ただ、それだけですわ」

「ふーん……」

説明はあっさりとしたものだった。

南条麻里香は陸上部の中距離エースだ。

何度か表彰もされており、家名とあわせて学園内でも有名らしい。

ただそれだけの一言で済ますには、優れた成績だ。

「……がらにもない昔話をしてしまいました。このことは内密に」

「誰に話すってんだよ」

「それもそうですわね……つきました。ここで最後ですわ」

校舎二階の奥。理科準備室。

ここで物音を聞いて、人影を見たというのが今回の幽霊の噂話だ。

「ふーむ……やっぱ鍵かかっているよな」

扉は締め切られ、中に入るには鍵が必要だ。

「ではどうしようもありませんわね」

「あ、いや」

くるりと戻ろうとする麻里香を呼び止めた。

「逆に不思議になったんだけどさ。鍵つてずっと掛かっているよな」

「……まあ、そうでしょうね」

「なら人影ってどこ見たんだ？ 中入れねーだろ」

「……………」

麻里香が押し黙る。

あゝに手をあて、何かを考え……。

「なるほど。確かに」

夜のここでは、扉越しに人影も見えない。

それなのに、何故人影なのか。

単なる根も葉もない噂話でしかないのか、何かしら理由があるのか……。

「……タマ」

「なんじゃ」

「お前、中分かるか？」

「しばし待っておれ」

タマが飛び降りて、中に入る。

彼女の存在は進矢らには触れられるが、生身の存在ではない。

タマを認識できる人間の存在により、双方向に影響を及ぼす。

それは、見えない、触れないという点でも同じ。

南条麻里香はタマを知覚できない。ゆえに、この場に置いてタマが物を動かす事はできない。

同時にそれは、物をすり抜けて中に入る事が出来ることもある。

「ですが、どうなさるんですの？ 神風さんに開けていただけますか？」

「それは後の手段だけど……南条はどう思う？ もし本当に侵入者だったとしたら」

「だとしたら？ ……ああ、わざわざ来る目的ですか」

はらりと肩に下がったローンを払う。

「別に相手の目的など、どうでもよいことですね。先日の盗難事件と同じく、犯人に魔がさしたのではないのでしょうか」

「……やっぱそうだよな」

このところ、街中でも学園でも事件が頻出している。

天都原学園でも先週半ばに窃盗事件があった。

女生徒の下着が盗まれるという、大胆かつ変態行為だ。

「ですが、わざわざ理科準備室に忍び込むというのの意味が分かりません。ただの怪談話なら、曰くのある場所として理解も出来ませんが……」

「生身の人間なら、目的はあるはずだよなあ」

本当にこれがわからない。

例えば……薬品を盗み出す？

でも、そんなの警備の目をかいくぐってくるなんてリスクが高すぎだ。

それならまだ、授業中や掃除の時にやった方がいい。

「何もおらなんだぞ」

中からタマが出てくる。

やはりハズレか……。

「……まあいいか。戻ろうぜ」

「そうですわね」

南条も少し釈然としない顔をしている。

校内に向かつて歩き始めた所で、ふと思いついたように口を開く。

「いわゆる、電灯の明かりはないでしょうか」

「懐中電灯のよろ？ 中に忍び込んだやつが持つてて、それで光で影が写ったとか」

「そうです。これなら人影を見たとしてもおかしくないはずですが……」

「でもそこまできると、幾らなんでも幽霊話にはならなそうだけだな。どう見ても人間つーか、不審者そのものだろ」

「……そうですわね」

それなら、何故幽霊か。

「なんじゃ」

視線を向けた進矢に抗議する。

幽霊と聞いて、反射的に肩に乗っているタマに視線を向けた。

……ただど違う。進矢が見ているのはその更に先。

鏡状になった窓と、そこに写りこむ自分の顔だ。

「もしかして……」

「どうか小さいまして？」

「いや、でも」

進矢は首を振る。

もう少しで何か閃きそうなのに、考えがまとまらない。

やはりこういう場合は、頭脳担当の相棒に任せられた方がいい。莉都ならあっさり解決してくれそうだ。

「なあ。設営で遅くなったとして、どこかの教室から理科準備室にいく必要ってどういう場合で出るんだ？」

「え？ ……そうですわね」

麻里香が考え込む。

転校生の進矢と違い、彼女には学園生活で蓄積した経験がある。



「まずは備品を借りた場合でしょうか。他には保管庫などもありますので、舞台装置の道具も預けられます」

「ドライアイスとか？ どっちかかっていうと家庭科室の出番っばいけど」

「いえ、家政系統の複数の部が使う場所ですから、他の部の荷物置き場にはなりづらいのではないかと」

「ああ、なるほど……」

その点、理科準備室なんて何も使わない。

何かしらの出し物をするなら科学室や実験室の方だ。データを張り出すなら教室でいい。……なんか見えてきたな」

校舎から出る。

「あ、おーい！」

莉都と和奏も、既に戻ってきていた。

「……特に何も見なかった。理科準備室の辺りは女生徒が文化祭の道具を持っていた。だ  
そうだ」

携帯を切った莉都が、進矢達に向き直る。

先日から天都原学園では事件が複数起こっている。警備は厳重化され、24時間体制だ。  
確認は簡単に取れた。

「んー。じゃあ結局何もなかったってこと？」

「……いや、何となくそれで分かったような気がする」

「ですが、理科準備室は何もなかったのですよね」

「……ん？ ああ、なるほどな」

莉都が相槌を打つ。

彼女にはそれでももう分かったらしい。

「えっと、どういうこと？」

「彼女達は見たじゃないか。自分たちを覗き込む幽霊の顔を。今、私たちが聞いたのは幽  
霊側の情報だ」

「……え」

「つまり……」

文化祭の準備で遅くなった彼女達は、当日使う道具を理科準備室に運び入れた。当然、室内の電気はついている。窓は鏡の役割をして、彼女達の姿を映し出している。しかしそれはただの光の反射であり、結局そこは窓に他ならない。中にいる生徒を確認しようと、警備員が窓に近付き……。

「……ああ、なるほど」

「いきなり窓から覗いてる顔があつたら、そりゃ驚くよな。ついでに鏡になってて、窓に近づくまでは見えてないだろうし……」

接近に気付かず、見えた頃には顔が窓のすぐ側にある。

この所の事件続きで、熱心な職員は中を検分しようときちんと確認できる位置まで近付いた。

「わかってみると、つまらんのう」

大規模でもなく、僅かに口づてにしか伝わらない幽霊話。

なんともあつけないものだ。

「あーあ。こういうのなんだろうだっけ……」

「幽霊の正体見たり枯れ尾花ですか」

「そーそー。それぞれ。結局上も何もなかったよー。国文科教室のも、そんな感じの見聞  
違いなのかなー」

「……でしようね」

「ちなみに、そつちはどんな話なんだ？」

「今と同じです。窓の外から覗き込むような顔があったと」

「……」

進矢は校舎の上を見上げる。

今の理科準備室は一階の奥。

しかし……件の教室は……。

「……なあ、もしそつちも警備員とかだとしてき。どうやって上まで昇ったんだろうな」

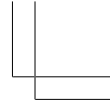
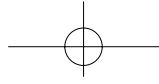
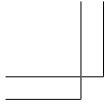
「……」

一同に沈黙が下りる。

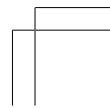
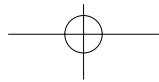
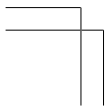
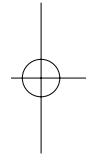
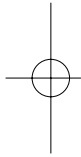
校舎の外壁。そこにはしがみつけるような物すら、ロクにない。

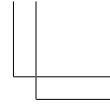
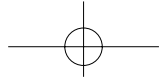
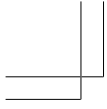
「さて。今里には黙っていたが、今しがたも居たからな。聞いてくればよかった」

「うわーんっ！ そういう話やめてよーっ！」

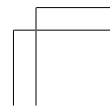
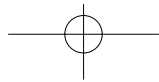
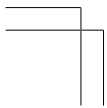
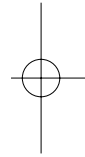
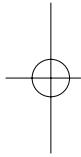


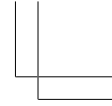
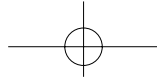
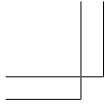
和奏の悲鳴がこだまする。  
徐々に暑くなる季節。  
そこに訪れた、一足先の怪談話。





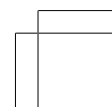
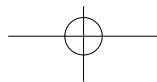
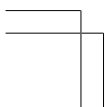
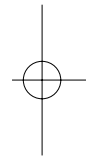
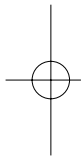
32





33

# Winter Episode



「ふう……」

吐き出した息が白く染まる。

コートを通してなお、冷たい冷気に身が凍んだ。  
年の瀬が迫る。

駅から続くアーケード街には色とりどりのイルミネーションが飾られ、赤と白と緑に染め上げられている。

赤い帽子をかぶった、白いひげの老人が街角のいたる所に飾られている。

ある店ではイラストとして、また、ある所では大きな人形として。更に別の店では、店員がサンタクロースの格好をしてケーキを販売していた。

「……………」

それを見て、夕月小夜璃は足を止めた。

目の前で売られているのは7号のイチゴのケーキ。

こんな大きな物を頼むには、月光館にどれだけ人口が居ればいいのか。

自分と、雇い主である少女。

たった二人しか住人の居ない洋館は、この季節には広さを増した錯覚さえ覚える。  
応接用にソファが置かれても、利用する者は殆ど居ない。



静謐。

車道を離れる事少し。だが森に囲まれた洋館は外界の騒音から隔離され、神風の森に立ち入る者もない。

ごく僅かな例外が天都原学園へ通う生徒たちであったが、それも迷い込んだり木立を探索する少数を除き、あの洋館まで近づく事もない。

それを寂しいと思う。

しかし、哀しいとは思わなかった。

「……？」

つい、と店員の視線が向けられる。

「あ」

すっかり凝視してしまっていたようだ。

何でもないと言った振って、その場を後にした。

——空から、ぼつりと雫が落ちた。

12月の寒い時期でも、関東地方は雪より先に雨になる。

降りが酷くなる前に戻らねばならない。月光館に続く山道は大雨が降ると足を取られて

しまうから。

——ニヤ——オ。

足を向けたその背に、かすかに一つ鳴き声が届いた。

「それで連れ帰って来たのか」

「はい……」

手の中にはタオルで包まれた猫がいる。

子猫という域を脱し、後数ヶ月もしないうちに成猫になるだろうに、やせ細り弱った姿は遥かに小さく見えた。

「……ふーむ」

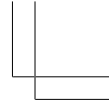
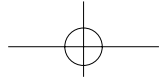
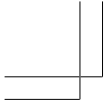
「やはり……いけませんでしょうか」

神風莉都はかすかに渋面になっている。

滅多に動じる事のない彼女にしては、珍しい仕草だった。

「別にいけないとは言っていない。……が、しかし……」

そこで何かを言いよどむ。



「莉都様？」

「いや、なんでもない。とりあえず明日病院に連れていけ。後の世話は……」

「甘えるように小夜璃に摺り寄り寄る猫を見て、言葉を止めた。」

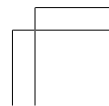
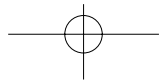
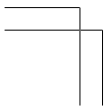
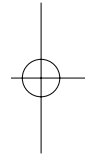
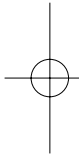
「これは言うまでもないか」

「はい。ありがとうございます」

それからクリスマスに訪れた小さな住人は、しばしの間、玄関ホールを棲家として留まっていた。

やがて冬が去り、暖かくなって――。

それが自然であるかのように、月光館から姿を消していた。



「……で、これがその猫か」

だらしなく寝そべった三毛猫の喉を撫でてやると、ごろごろと気持ち良さそうに鳴く。ぐでんとデカイ図体を気だるげに返し、ごろごろと床の上を転がった。

「話で聞くと可愛いのに……いや、今も可愛いんだけどね。でもなんていうか……」

「なんだか、ぬいぐるみたいですね」

「だよー。抱っこっていうより、抱えるって感じ」

和奏さんと白雪も猫を囲む。

ふらりと月光館にやって来たデブ猫は、まるで我が家から締め出されたのだと言わんばかりに、カリカリと扉を引っかいていた。

「しかもどっかの飼い猫だろ。首輪ついてるし」

「ですが、以前ここに住んでいたんですよね。なんだかすごく堂々としていますし」

「そーだよー。こら、おまえー。そんなに甘えて。これまでどこ行ってたんだー？」

和奏さんに撫でられて、ごろごろふにやーと甘えた鳴き声をあげる。

「物怖じしないやつだな」

「そいつは小夜璃がつれてきた時もそうだった。……確かに妙に人慣れしてたな。寒さで衰弱してただけで、その頃から人に飼われてたかもしれない」

ソファに座ったまま、莉都が事も無げに言う。

この猫は久しぶりに月光館に帰ってきたはずだが、再会を取り立てて喜んでるようにも見えない。

それでいて、どうでもいい等と思っているわけでもないのが、莉都の不器用な所だ。

「しかし参ったな。飼い猫か」

そこでようやく、莉都がこちらを見る。

「飼い主が分かるといいんだけどね」

「外に出しておけば勝手に帰るんじゃないか？」

「そうかもしれませんが……」

白雪が困惑している。

当の本人は、ここが我が家だと言わんばかりに毛の長い床の絨毯を転がり、くつろいでいる。

「……外に出すのは、なんか可哀想だよな」

「はい……」

人懐っこさまでっぷりとした愛嬌に、女性陣は早くも陥落気味だ。

「……まあ、そのうち帰るだろうし、小夜璃さんにも知らせておくか」

「そうだな。居なくなった当初は落胆していた。それに……」

そこで莉都が少し言いよどむ。

どうした？ と問うと首を振った。

「後で教える。ただ明日の日付を思い出しただけだ」

「ああ……」

壁にかけられたカレンダー。

そこにはぐるぐると赤い目印がつけられている。

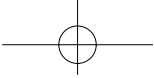
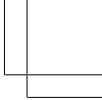
12月25日。クリスマス。

この日、月光館でパーティーが行われる予定だった。

初夏を前に終わった事件の後は、俺たちは穏やかな日々を過ごしていた。

それは緩やかに過ぎていく、変わらない日常。

その合間に差し挟まれるように、幾つか不思議な事件は起こったが、今もこうして過ご



せている。

莉都と和奏さんと白雪と。

そして小夜璃さんに先輩。先生たち。陽太に上杉にクラウス。

皆で過ごした毎日を締めくくる、一年の終わり。

きつとそれは、どこの家でもごく当たり前に開かれるモノなのだろう。

家族で、あるいは友達どうしで集まって。

ただ俺にはそんな、当たり前のイベントとは無縁に過ごしていた。

俺が入るとロクな事にならない。

それがここに来るまでの常識であり、ごく自然な認識だった。

だから柄にもなく浮き足立ってると思う。

そして、同時にそれでいいんだと思えるのが嬉しかった。

「そんな事を気にされていたんですか？」

隣を歩く小夜璃さんが何気ない調子で言う。

「そりゃ気にしますよ。……今までずっとそうだったんですから」



だからクリスマスパーティーなんて言われても、何をどうすればいいのか皆目検討もつかない。

そんなの適当でいいんだよと和奏さんはあつかんと言っていたが、気軽に言われても困惑する。

それで俺と小夜璃さんで買い物に出ている。役割は荷物持ち。

とはいえ、ほとんど小夜璃さん任せではどこまで役立てるのかもわからない。

「……莉都も一人で行っちゃいましたし」

本来なら隣に居るのはアイツだったはずだ。

しかし、莉都は昼から予定変更だと告げて、一人で出かけて行ってしまった。

「ふふ」

小夜璃さんが意味ありげに笑う。

「……なんですか？」

「莉都様も、楽しみにされているという事ですよ」

「はあ」

曖昧な返事を見て、更に楽しげになる小夜璃さん。



「あ」

そして、その足がピタリと止まった。

小夜璃さんの先。

何か大きな紙袋を抱えた莉都が歩いていた。

まっすぐアーケード街を抜けると駅前に出る。

莉都の足はよどみなく、迷う様子もなく進んでいく。

「どちらに行かれるのでしょうかね」

その後を少し離れてついていく俺たち二人。

「……普通に話しかければいいじゃないですか」

「何を言っているのですか。このようなチャンス、滅多にありません」

「はあ……」

小夜璃さんはとても楽しそうだ。

「それより進矢さん。分かっていますね」

「……正直もう少し離れた方がいいと思いますよ。あいつの勘の良さは普通じゃないです」

から」

「そうですね……」

そんな事を話している間も、莉都は気付いた様子もなく目の前のデパートに向かって歩いていく。

「行きますか？」

もちろん、と返しかけた足がとまる。

入ったと思ったら莉都がすぐ出てきて、他の店目指して歩いていく。

どうも理由があつて入ったわけではないらしい。

何か目的が合つて入ったのなら、今もデパートの前をうろろろとしているはずもない。

莉都は相変わらず両手で紙袋を抱えたまま、ショーケースを凝視している。

そこに何が入つてるのか俺たちの場所から見るとは出来なかつたが、珍しく悩んでいるようにも見えた。

遠目にも何か考え込む。

かと思つと、立ち去ろうとする。

更には踏みとどまり、中に入ろうと迷っている。

……本気で訳がわからない。

「ふう」

——と、小夜璃さんが唐突に笑った。

「莉都様とても可愛いと思いませんか」

「……思わない事もないですが、急に言い出すそのところは？」

「本人に聞いてもらってください」

とん、と背を押された。

前につんのめるようにしてニ、三步踏み出し、小夜璃さんを振り返る。

「買い物に行つてまいります。莉都様をよろしくお願いしますね」

「……なんなんだ。一体」

小夜璃さんは言うだけ言つて、さっさと行つてしまった。

仕方ないので、挙動不審な行動を続けている莉都のところに向かう。

「……………」

相変わらず、熱心にガラスケースの中を覗いている。

コイツが本気で望むなら、買い占める事もできるだろうに、何をそんなに見ているのか。  
「何やってんだ？ さっきから」

「何もしていない。ただ見ていただけだ」

ふん、と不機嫌そうにそっぽを向く。

「どれ」

ガラスケースの中を覗く。

そこには、クリスマスを飾るディスプレイが所狭しと並んでいた。

「あまり面白いものではないだろう」

「……まあ、確かに。ちょっと拍子抜けした」

「だろうな」

莉都が熱心に見ているくらいだから、さぞかし珍しいものでもあるんじゃないかと思っ  
ていたんだが……。

「……………」

ケースの中では手の平サイズのサンタクロースの人形が並んでいる。それらは機械仕掛  
けの玩具で、手にした楽器を打ち鳴らしている。

クリスマスツリーには綿の雪が積まれ、色とりどりの明かりで綺麗に染め上げられてい

る。

シングルベルを奏でる、明るくもどこか寂しい音色が聞こえる。

中央にそびえるテーブルには巨大なケーキが置かれ、メリークリスマス文字が入っていた。

本当に何の変哲もないクリスマスを演出する光景。

デパートで販売されている歳末の目玉商品を売るために用意された、この時期特有のどこにもあるコーナーだ。

しかし――。

たったそれだけの事なのに、何故かそこから目が離せなくなっていた。

目の前にある楽しい光景。

だけどそれは縁の無いものではなく、これから自分に訪れる物でもあるのだから。

「……………進矢？」

莉都の訝しげな声に、我にかえった。

こんなんじや、先ほどの莉都をまったく笑えない。

「……………これ、けっこう見らまうな」

「そうだな」

ぼつりと返し、俺の隣に並ぶ。  
そのまま少しの間、二人で同じ物を見ていた。

僅かに日が傾いて、そこから離れた。

アーケード街を歩きながら、莉都の手にした袋について聞いてみる。

「そういや、それ何入ってるんだ？」

「後になれば分かる。別に教えても構わないが……」

「ああ、なるほど」

明日行われるのはクリスマスパーティーだ。

ここでは定番行事らしい、プレゼント交換とビンゴ大会が開かれる。当然発案は和奏さんで、各自それぞれが明日までに何かしらの物品を用意しておくようにと言っていた。

「お前はもう決めたのか？」

「……実はまだなんだ。小夜璃さんの買い物を手伝うついでに何か見繕って行こうと思っ  
てただけど」

その本人に置いていかれてしまったのだから笑えない。

そして、用事があるといつて俺をおいていった当人が、何故こうして隣を歩いている。

「そもそも、莉都こそ用があつたから出かけてたんじゃないのか？」

「……ああ、うん。まあな」

莉都は妙に歯切れが悪い。

「つか、その荷物抱えてるの大変だろ。持つぞ」

「いや別に構わない。そこまで重くもないからな」

「そっか」

それだけ話して、後は二人並んで無言で歩く。

この季節を彩るイルミネーションは、街のあちこちまで続いている。

アーケード街もご多分に漏れず、店の前にはサンタとクリスマスツリーを模した飾りが置かれていた。

ケーキ屋は今の時期こそかきいれどきなだろう。

サンタのコスプレをして熱心に販売している。

「ちょうど一年前だそうだ」

急に話し出した莉都に、視線で問う。

「昨年、小夜璃は丁度この道を歩いていて、あの猫を見つけたらしい。ダンボール箱に押

「し込められていて、寒さに衰弱していたようだ」

「……当時は捨て猫だったのか」

「多分な」

それ自体について、莉都は酷いとも可哀想とも言わない。

思っただけでも口に出さない。

「その後、ぶらりと居なくなってしまうが……誰かに飼われているのなら大丈夫か。栄養状態も良いみたいだしな」

「あれは良すぎる気もすっけどなあ」

人懐っこい猫だった。

今の飼い主に愛されているのだろう。

「しかしそんなに月光館って居心地悪いのか？ 逃げ出すほどだし」

「さてな。ただ、あの山ではあまり動物の姿を見ない。野生の獣に嫌われる何かがあつて

も不思議ではないな」

「……確かに」

過去に凄惨な儀式の行われた御津上の山。

感覚の鋭い獣なら、何かを感じ取る事もあるかもしれない。



「そこをこうして歩いているのだから、不思議なものだ」  
「まったくだ」

一年前のこの時期の事は、よく覚えている。  
もはや忘れられない記憶の欠片。あの日から全ては始まったような気さえしてくる。  
だから、仮にもしあの時に戻れるとしても。数ヶ月の入院生活があったとしても、同じ  
選択を取りたい……と、そこまで考えて妙な既知感があった。  
「あれ？」

莉都が訝しげに俺を見る。

「なんか前にもクリスマスの話をしたような……」

「ああ、そういえばしたな。あれも半年前のことか」  
半年前……。

「ああっ！ そういえば！」

学園祭の時に、莉都とそんな話をした。

もし過去に戻れたとして、あの頃森の中を散策していた莉都と俺は会えない……と。  
「……………」

そして、同時にその後の事も思い出した。

——もちろん、強烈な出来事すぎて忘れるなんてできないが、それでもあの時重ねた肌の感触も強く記憶に残っている。

「変な目で見るんじゃないぞ」

「……見てねーっての」

秀麗な顔を僅かに染め、莉都がついと視線をそらす。何度肌を重ね、莉都から求めてくるようになって、微妙に恥ずかしがるのは変わらな

い。

「あー……ま、まあ。それはそれとして、だ」

「……ほんと一つ咳払いで誤魔化した。」

「あん時、お前森の中を歩いてたとか言ってたよな。それってまさか……」

「ん？ ああ。見慣れない館に戸惑ったのか、体力が戻ったからなのか、元気になった途端に外に飛び出していった。小夜璃が気にかけるのでな。探すのを手伝っていた」

「なるほど」

「ちなみに徒労に終わった。散々探し回って戻ってきたら、入り口の戸の前で丸くなっていた」

「……猫ってのはほんと好き勝手に動くよな」

それから暫くして本格的に月光館を出て、またふらりとやって来るのだから気ままなものだ。

「とはいえ、いきなり人口密度も増えているのだから、少しは驚くなり面食らうなりして欲しいものだな」

「まるで我が家のようにくつろいでたもんな……」

ペットは飼い主に似るといだが、今の主はそんなに神経が太いのだろうか。

それとも自由気ままな猫の性分なのか。

「だが——」

何かを言いかけ、それでふと柔らかに微笑んだ。

「このような驚きは、楽しいな」

「……だな」

クリスマスパーティーを楽しむのも。相手に渡すプレゼントに頭を悩ますのも。気まぐれな猫の気性に振り回されるのも。

——何もかもが、楽しい日常のひとつだ。

「でも、アイツはどうする？ 飼い主が探してるんじゃないのか？」

「そうかもしれないな。一応、保健所の方に預かっているとの連絡をしておくよう小夜璃

に手配してもらっているが……」

「……まあ、居なくなっただからってすぐに保健所行く方が少ないよな。きっと」

「ああ。今も探しているのだな……あのように」

「ん？」

莉都が目を向ける。

電柱には一枚の紙が張られている。

カラー印刷されたチラシには、一匹の猫の写真が写されている。

……案の定と言うべきか、ごく最近見覚えのあるでっぷりとした体格のいい猫が、腹をカメラに向けてごろごろと転がっていた。

「……定番っちゃ定番だけど」

「この場合は、楽に見つかってよかったと言うべきか」

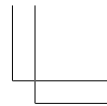
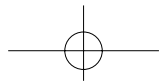
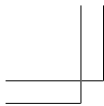
そして、そこに書かれた連絡先に目を丸くする。

張られて間もない張り紙。

あまり広くないアーケード街だ。探している人間も、あっさりと見つかった。

小太郎と南条がいた。

店の人と話をし——店主らしき人に大仰に頭を下げられては逆に下げ返し、そんな事を



している。

そうしてややあって、小太郎が手にした紙を相手に渡していた。

「……いくか」

「そうだな」

二人に声をかける。

探索は無意味だと教えなくてはならない。

「二人とも」

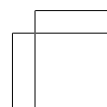
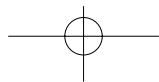
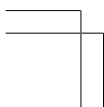
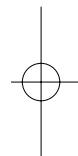
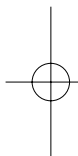
「あら」

南条が俺たちに気付く。

小太郎が頭を下げた。

——翌日のクリスマスパーティー。

出席者が増えたの言うまでもないだろう。



進矢と別れてから、夕月小夜璃は一人、アーケード街への道のりを歩いてきた。店のスピーカーから流れる明るいマーチにあわせ、どこか浮き立った足取りで。

それが、びたりと止まった。

店の前でサンタクロースのコスプレをした店員が売っているのは、7号サイズのイチゴのケーキ。

小さく切り分ければ、10人前ほどの大きさだ。

今の月光館に住む人数を数え、参加するであろう人の顔を思い浮かべ——そして懐の重さを考える。

「クリスマスケーキはいかがですかー」

まだ学生だろうか。

寒さに上気した赤い頬。それにも負けじと小夜璃に声を張り上げる。

「では、一つお願いします。取りに来るのは明日でもよろしいかしら」

「はい、大丈夫ですっ！ ご予約ありがとうございます！」

差し出された用紙に、さらさらと記入をしていく。  
昨年感じた寂しさは、どこにも残っていなかった。

## §

「まったく参りましたわ」

月光館への道すがら、南条がぶつぶつと文句を言っている。

「南条の飼い猫だったとはなあ」

「私ではありません。お父様のです」

「……同じじゃないのか？」

てとてと後ろを着いてくる小太郎に確認してみる。

「はい！ 旦那さまは動物がお好きなんです。他にもたくさん飼われています」

「へえ。例えば？ やっぱ血統書つきの犬とか」

「いえ……ミドリガメにフェレット。それにキツネの子供と猫が2匹」

「……ずいぶん庶民的なんだな」

「あつ！ 後は熱帯魚も飼われていました。グッピーが泳いでいます」

「……………そっか。なんか好感持てる親父さんだな」

「……………あえてノーコメントという事にしてください」

「はあ、と盛大にため息をついた。」

「どこかに出かけては、捨てられてる動物を拾ってくるのですよ。かわいそうだななどと言って。そのうち動物園でも開けそうですわ」

「猫とキツネと亀とグッピーの動物園か……………」

「学校の飼育委員みたいな動物園だ。」

「金持ちが熱帯魚つつつたら、アロワナとかピラルクみたいな想像すんだけど、まさかグッピーとはなあ」

「進矢は熱帯魚には詳しいのか？」

「莉都が聞いてくる。」

「前に少しバイトしてたことがあるっただけ。でも、あんま合わなかったからすぐ辞めちゃまった」

「そうか」

「それで納得したのか、軽く頷く。」

「それとは反対に、南条は深々とため息をついた。」



「前は居ましたわよ。ピラルクー。春先に停電があった時に、ヒーターが止まってあっさり亡くなってしまいました」

「そうなのか……かわいそうにな」

南条はますます嫌そうな顔をする。

「あ、あはは……」

「……3メートル近い巨大な魚を運び出す保健所の方こそ、おかわいそうと言うに相応しいですわ」

想像してみるとものすごくシュールな光景だ。

「しかし、南条のお父さんが動物好きだったとはなあ」

思わず漏れた本音に、莉都が相槌を打つ。

「まったく意外な事実だったな」

§

月光館に戻ると、なにやらバタバタと騒がしかった。すでに飾り付けをしているのかと思つたが、その様子はない。

廊下を駆ける音が上から響いてくる。

俺たちが帰ってきた事に気付いたのか、和奏さんが2階から顔を覗かせた。

「あ、おかえりー。麻里香ちゃんと椎堂君いらっしやいー」

「……何かあったんですの？」

「それがねー、聞いてよー。ここに居た猫が急にいなくなっちゃって」

「え」

南条がヒタリと固まる。

まさしくその猫を引き取りに来たのだから、当然だ。

「さっきから手分けして探しているんだけどねー。ほんとどこに行っちゃったんだろう」

「まさか、また出てったとか？」

「それは困りますわ！」

南条が和奏さんに問う。

「建物の中にいるのですわよね」

「多分ー。さっきまではそのソファで寝てただけどねー。ほんとどこ行っちゃったんだろう」

「了解ですわ——申し訳ありません、私も中を探させていただきたいのですが」

「好きにしてくれて構わないが……」

「では小太郎。参ります」

「はい。それでは失礼します」

へこりと頭を下げて、小太郎が南条に続く。

階段を上がった所で和奏さんと探す相談をする。

「……俺たちも手伝うか」

「そうだな……ああ、そうだ」

「ん？」

「あの猫、三毛猫でしかもオスだったな」

「そーいやそーいだったな。それが？」

いや、と莉都は納得したように首を振った。

「なるほど。他にはキツネに亀か……道理で南条の父親が大事にするわけだ。さつさと見つけて返してやろう」

こうして猫一匹探し始めると、月光館の中もずいぶんと広い。  
莉都の持っていた荷物はとつくに部屋に放り込んである。

手分けをして一階から順に探していく。  
図体のデカイ猫だが、それでも動きは人間よりも俊敏だろう。思わぬ所に入り込んでいるのかもしれない。

「三毛猫のオスだからって何かあんのか？」

「染色体の問題から、三毛猫のオスは産まれる確率が極めて低い。だから、幸運を呼ぶと言われてる」

「……お前よくそんなの知ってたな」

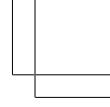
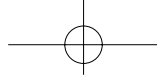
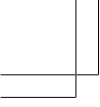
「夏前に少しな。その手のジंकスが何かしらのヒントにならないかと、調べた事がある」  
確かにあの頃は幸運だの不運だのに悩まされていた。

それは今も少し続いているのだが、以前に比べれば大したことじゃない。

「たかだかクリスマスパーティーだというのに、なかなかスムーズに行かないものだな」  
ぼやくようで、それでいて妙に楽しげに莉都は言う。

「だから楽しいんだろ？」

「そういうことだ」



それから夕方まで手分けして月光館を探し回る。  
結局その猫は見つかった。  
夕方、先輩の部屋で寝ているのを、下に降りてきた彼女が連れてきた。

「ありがとうございます。勉強のお邪魔をしては居なかったでしょうか」  
猫を両手で抱きかかえた南条が、先輩に頭を下げる。

「いーっていーって。殆ど膝に乗ってただけだしね」  
「そうですか」

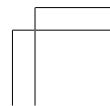
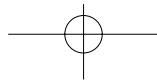
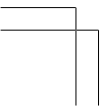
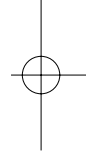
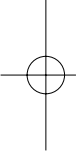
もう一度優雅に会釈して、ではと背を向ける。  
「なんだか納得がいかな」

南条たちを見送りながら莉都がぼつりと言った。

「何が？」

「……………」

それに返す、僅かな沈黙。  
ややあって、微妙な不満と共に口にした。



「あの猫。私の膝には乗ろうとしないんだ。小夜璃にも名風にも……進矢にすらすぐ懐いたというのに……くそ」

「……………」

思わず先輩と顔を見合わせる。  
直後、爆笑に包まれた。

月光館の飾りつけも進み、ホールの角にはクリスマスツリーが飾られている。  
夕食も終わり、誰もいない空白の時間。

「そうだ、と思い出したように莉都が言う。」

「少し、ここにいてくれ」

そうして部屋に戻っていく。

戻ってきた時には、両手を後ろに回していた。

「正直気が早いのだと思う。……が、やはり自分には無理そうだと確信した」  
視線をそらし、早口で言う。

何を？ とは聞けなかった。

馬鹿でかいリボンが、後ろに覗いている。

「だからお前には悪いが、一足先に渡しておく。これをどうするも進矢次第だ。明日がいよいよというなら明日にするが……」

よほど恥ずかしいのか、昼間よりも深く頬を朱に染め、視線を宙に彷徨わせている。

「……いや」

莉都に向けて、手を出した。

でも、そこには何も乗っていない。こんなことなら、俺も持つてくればよかったと後悔する。

「ありがたく貰っておく。……けど、バカでかいな。何が入ってるんだ？」

「できれば部屋に戻ってからにしてくれ。もちろん、見たいというなら止めないが……」

「……？」

そこまで狼狽する理由がわからない。

リボンを外し、中を覗く。

……やはり分らず、手を突っ込んでみた。妙に柔らかく、ふかふかとしている。

「……？」

引っ張り出して広げる。

そこにはマフラーがあった。

「小夜璃に相談したら、それが定番なのだと聞いてな。確かにお前が巻いてる姿は見たこと無かったからな」

「あ、ああ……」

ここから学園へは近く、無しでも過ごせると思ってた用意もしていなかった。

それでも肌寒い時は多々あったが、我慢できる範囲でもある。

——が、もちろんあるなら当然ありがたい。

そうしてこの馬鹿でかい包みは、当然中にまだ入っている

「これは？」

今度は折り畳まれた毛布のようなものだ。

「ストール……じゃないよな。馬鹿でかいマフラーみたいな……」

「ブランケットだ。部屋で使ってくれ」

「なるほど」

確かにこの季節、机に座っていると膝の辺りが妙に寒い。



ありがたく使わせてもらおうことにする。

そうして、中に手を突っ込むと更にまだまだ入っている。

「……もういいだろう。後は部屋で広げてくれ」

「そうだな」

苦笑して袋に戻す。

「ありがとう。大事に使わせてもらおう」

「そうしてくれ」

あくまでそっぽを向いたまま、ふてくされたように言う。

莉都の不器用な照れ方が、妙に可愛い。

「俺もプレゼント持ってきてくりやよかったな」

「買うタイミングを逃しているだろう」

「……そうなんだよな」

あのまま南条たちに遭遇したから、買い物も何もかも放り出して帰ってきてしまった。

「だから……」

「キスをしてこの場合は誤魔化す、などというのはいらんぞ」

バレてるし。

「じゃあ、悪いけど明日な。楽しみにしててくれ」

「ああ、期待させてもらう」

それから取りとめのない話をして、部屋に戻る。  
別れ際。

「進矢」

「ん？」

振り返った先、素早く口元を柔らかいものが掠めていった。

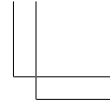
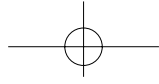
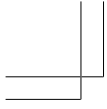
「いらんが、与える分には構わんだろう」

「……まったく」

してやったりとばかりの、晴れやかな笑顔。

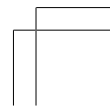
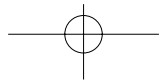
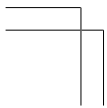
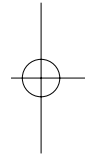
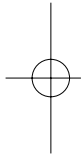
この街で過ごす冬の日。

特別なことが起こらなくても、それでも掛け替えない明るい日。  
それはこんな、真冬にあった一幕の出来事――。



69

### 夏の推理ゲーム



外の気温は四十二度。

今年一番の真夏日を記録し、窓ガラス越しに見える道路に陽炎が揺らいでいる。大量はどこまでも強く輝き、世界は白く染められている。

こんな日こそ喫茶店は満員御礼。混雑に賑わい、涼を求めるお客さんがひっきりなしに店内に入る——というのは幻想だ。

ここまで暑くなってしまうと、そもそも外出する気力自体をそがれてしまう。外に出た人も、さっさと自分の家に帰りたくなくなってしまふものだ。

事実、店の前の大通りは驚くほど交通が少ない。上がり続ける気温のせいか、車すら滅多に通らない。

だからエアコンがフル稼働する涼しい喫茶店にも関わらず、今日は珍しいほど閑古鳥が鳴いている。

店長の鈴さんも居なければ、暑さにやられたとかで、他のアルバイトの人も急な休み。掃除も何もかも終わってしまい、伸び悩む客足に予想外の暇を持て余していた。

店内の人影はまばら。  
奥のテーブル席には夏休みの学生らしき少年達が談笑している。

部活動の帰りか、ここ何日か連続して見る顔だ。

彼らは店内を眺めては、誰かを探す仕草をしている。

大方、真央か鈴さんか——あるいは、他のバイトの子が目当てなのだろう。そういう客は珍しくないで、コーヒー一杯で粘られても武士の情けで見なかつたことにしておく。

バイトの子の中にはお客さんにしつこくされたとか、告白されたなんて子がいるみたいだけど、遠くから眺めてるだけなら特に問題はない。暑い中きてくれるのだから御の字だ。

しかし、問題ある客というのは、何もその手の話題だけじゃない。

僕の正面にいるのはまさしく問題の客だ。

カウンターには一人、アイステイヤーのストローを啜える少女がいた。

「それで、幽霊ってなんだと思う？」

アイステイヤーを優雅に傾けながら、彼女は言った。

「……いきなりそんなこと言われてもな」

というか、ずいぶん唐突な話だ。

「姿が半透明で、触れなくて、どこにでも現れて……ついでにラップ音とかポルターガイスト現象なんていうモノを起こしたり、呪ったり祟ったり……ロクなものじゃないわね」居ればの話だけど、と最後に締めくくった。

「まあ……そうだな」

居ればの話だけど。と僕も続けた。

「一番有名な所では心霊写真とかコックリさんというやつかしら？ 学校って所では集合写真を撮るたびに皆で舐めるように見たり、放課後集まってやつたりするんでしょ？」

「それが当然みたいにいわれても困る。というか、なんでそんな偏ってるんだ？」

「おかしいわね……そう言ってたんだけど」

本気で首を傾げている。

それで、誰がそんなことを言ってるのか理解した。

「心音め……」

「ま、そういう即物的なのは置いといて、やはり幽霊話なら四谷怪談かしら？ それくらいなら知ってるでしょ？」

「お皿数える奴だっけ」

「……それは番町皿屋敷。あなた本当に日本人？」

呆れられてしまった。

「うっさいな」

「ま、いいわ。どちらにも共通しているのは、崇りということね。つまり、実態を持たな

い存在がもたらす恨みの感情。それに恐怖を覚える。恨みも、恐れも、どちらも誰しも持っているものなのに。

それとも、だからなのかもしれない。相手に恨まれようとんだらうと、生身の存在ならまだ手段があるものね。強者が弱者を虐げるなんてよくあること。片方の立場が変わった所で、それは本来どうにもならない力関係のはず。——だというのに、死者の怨念というのをこの国は古来より恐れている。過ぎた思いは既に畏怖と呼んで差し支えない。人を呪わば穴二つ——仕舞いには、自分のために呪うなとまで言ってるわ」

「はあ」

「ほら。バカ面下げてないでアイステイーお代わり」

「水だけになったグラスをこちらに突き出す。」

「紅茶にお代わりのサーブスははないぞ」

「いいから注ぎなさい。代金なら心配しないでいいから」

「へいへい」

そんな台詞、一度でいいから言ってみたいものだ。

そして誰が聞いても嫌味にしかとれない台詞でありながら、彼女が混じりつけなく純粹に言っている事も知っている。

彼女はある意味、本当の箱入りお嬢様だ。

「……で、いきなり幽霊の話なんてどうしたんだよ。その手の話題に最も縁遠いくせに」

「それは心外。むしろ、私が一番近いと思うんだけど」

「とうとう？」

「不確定であやふやつてこと。実体があるかどうかなんて些細でしょ？ 幽霊を実際に目

撃したとして、触って確かめるなんて出来る人どれだけの？ というか、幽霊に首を絞

められたとか、背中を押されて突き落とされた。足を引っ張られた。そんな話もあるくら

い——ほら。なら大した違いはないじゃない」

「いやいや。大違いだろ」

今日の前のいる彼女と、そんな話でしか聞いたこともない存在を同一視なんて出来るわけがない。

「ま、それはそれでいいんだけど」

「なんだかよくわからない話だな。結局、何があったんだ？」

「特になにも。ほら、ミルク多めにして」

ミルクポットを出して、グラスに継ぎ足す。

大雑把にストローでかき混ぜた後、ずずーっと吸った。



「それより、あの清川の孫のしつけはどうなってるのよ。一体どうやったらあんな性格が出来上がるんだか……」

「……ぶつ」

「ぎろり、とんでもなく鋭い眼つきで睨まれた。」

「アンタのおかげで出来上がったとか本人言ってたわよ。しっかり教育しなさい」

「なんだ。けっこう仲いいんだな」

「……別にそういうわけじゃないけど。清川の家に行くと、ああだこうだとうるさいのよ。アイツの両親は家を継ぐ気無いみたいだし、そうしたら時期筆頭でしょう？ まったく

……本当にもう、どうしてこんな……」

ぶつぶつと何かいっている。

彼女の生活は心音のお爺さんに頼ってる部分もあり、孫娘を邪険には出来ないらしい。そんな所もやはり人間らしく、なんだか楽しくなってしまう。

「とくととさつきの話も心音絡みか……今度はアルが七不思議探険にでも連れて行かれたか？」

「私が連れて行くように言ったの」

「へえ……」

それは正直驚いた。

「一体何があったんだ？」

「正直たいしたことじゃないんだけど……」

アルがいつものように、つまらなそうに口を開く。ポケットからプラスチックの破片を取り出し、カウンターに置いた。

§

春から、季節は大きく変わっていた。

遊歩道に舞い散る桜の花は緑葉に変わり、冷たい風に背筋を振るわせた田舎道には屢気楼が立っている。

真夏の太陽の下、少女は日傘を手に歩いていた。

小柄な少女だ。

薄い色のワンピースに、血管が透き通るほど白い肌。深くさした日傘が影になり、彼女の表情は伺えない。

農道を歩く作業服の老人が会釈して擦れ違ふ。途端に珍しいものを見たとはかりに彼女を振り返った。

白い傘の下に見えた色。

背に垂れた長い髪。

それは暑さを瞬間忘れさせる、雪の色をしていた。

「いやー。毎日毎日あつついねー」

うちわで胸元に風を送りながら、清川心音は碎けた調子で言った。

彼女の部屋はエアコンが掛けられ、最適な温度に保たれている。壁に掛けられた受信部を見ると二十六と表示されていた。

だというのに、心音はついさっきまで外にいたように、汗を流し、涼を求めている。

暑いというならもつと下げればいいのにとアルは思ったが、微妙な温度設定は部屋の主そのままだと嘆息した。

「見えるわよ」

「へ？ なにが？」

自宅の気安さかホットパンツにタンクトップという薄い格好だ。

更には下着もつけずに胸元を引っ張っているのだから、谷間どころかそれ以上のものが先ほどから覗いている。

首元から流れた汗がバストの間を零れ落ちるのが扇情的だ。そこにタオルを無造作に突っ込んで汗を拭っているのだから、あまり人には見せられない姿になっている。

「アルチーはいつも涼しそうでいいな。何か秘訣でもあるの？」  
「別に。体質としか」

白い髪は日光に強く、代謝能力の高い身体は熱を溜め込むこともない。

アルにとっては単なる事実でしかないが、心音はうらやましいと連呼している。

ごろごろと床の涼しい所に頬をつけてる姿は、もはや半裸に近いほどになっていたが、そこまで注意する必要もないと判断し、この話題には触れないことにした。

「……それで、いつ帰ってくるの？」

「お爺ちゃん？ さー、どうだろ。電話聞いてすぐ慌てて出て行ったから、何かあったのかな？」

「そう」

書類が出来たから来いと言っておきながらこのザマだ。

自分で言い出したくせに連絡一つよこさない。

どうもこの一族の辞書には、契約とか遵守という言葉が書かれていないのだろう。次の世代には羞恥なんて言葉も消えてるかもしれない。

「で、アルチーは今日はどうしたの？ 先輩の弱み探しにアルバム探索？ ダメダメ。残念ながらないよ。もう去年あたしが探してるもん。もっと撮っておけばよかったな」

「待ちなさい」

「なに？ アルチー」

「……先ほどからしている、たわけた呼び名はなに？」

「呼び名？ アルチー？」

「先々週は確か違っていたわね」

「前はアルっちだっけ」

「さらにその前はアルアル。アっちゃん。アルたんと遡っていくわ」

「うわー。よく覚えてるねー。何がお気に入りに？」

「そんなもの無いからやめなさい」

「えー」

「……はあ」

このやり取りも毎回事だ。

清川心音はアルに変な呼び名をつけては、止めさせられる。

——どうしてこんなことになっているのか。

そう。切っ掛けはあの春の事件だ。

棕木悠斗とアルにそっくりの少女を中心起こった彼女達を巻き込んだ2週間。

北関東地震に付随して発生した、長浜市銃器発砲事件。

世間的な扱いはただそれだけ。

大学生が一人撃たれ、関連すると思われる前後の事件で大量の重軽傷者を出しながらも完全解決することなく沈静化していった。

だけど、関わった個人に訪れた変化は大きかった。

アルはそれまでの生活を捨て、人の中で生きることに。そして今はそのために、必要な準備を進めている。

だから、地元の名士である清川翁の力を借りるのはいい。

それ自体は以前と変わりなく、ただ表面化したに過ぎない。

一つだけ不満があるとすれば——。

「アイス食、べる？ 何がいい？」

必然的に、この能天気な少女とも関わりを持つことになってしまった。  
自室にある小さな冷蔵庫を「そこそと漁っている。気にはしないようにしていたが、ホットパンツから伸びる白い足と、短い丈から覗いている下着は、こいつは本当に気付いていないのかそれとも突っ込みを待っているのだろうか、などと考えてしまう。」  
そんな姿で四つんばいになって冷蔵庫を漁っているのだから、いつそのこと引き摺り下ろしてやるうかとも思う。

中からカップのアイスを取り出すと、渡してきた。

「はい。ハーゲンダッツあったからあげる」

「……どうも」

どうにも調子を狂わされる。

「何かやるなら悠斗にでも言えばいいんじゃない？ あのお人よしなら、断ることもしないでしょう」

「うーん……そうなんだけどねー」

言いながら包装をとり、自分は五十円のガリガリ君にかじりついている。

「まーまー。今はせっかくなアルちーがいるんだから、ちよっとお知恵拝借させて欲しいワケなのですよ」

「構ってるほど暇じゃないんだけど」

「いいからいいから。お爺ちゃん帰ってくるまで協力してよー」  
床に紙を広げる。

見慣れたこの街の地図に、幾つか印がつけられている。

「これは？」

「ふっふっふ。心音ちゃん夏の怪奇特集いん長浜ですよ」

「また……？」

手に取り、傍らのペンを取る。

地図にあるうち、幾つかの部分にバツをつけていった。

「あ、ああーっ！ なにするのーっ」

「今消した所は、私の住処と倉庫だから何も無いわよ。どうせ、無人の家屋に人影があったとか、物音がしたとか、侵入者が変な目にあって追い返されたとか、その程度の情報でしょう？ 心音の思いつきで無駄足踏むのはごめんだわ」

「う、うう」

凶星だったのか困ったように唸っている。

「……この調子じゃ、他のところも似たり寄ったりでしょうね。夏休みで浮かれた子供が



溜まり場にでもしてるんじゃない？」

「う、うううん……そう言われるとそうなのかもしれないけど」

「一人で行くのはやめなさい。心情的には貴女が勝手に危ない目にあっても構わないけど、いざそうなったら実質問題で支障が出るわ」

「ううん……でもなあ」

「本当に行きたいのなら止めないけど。何か事起こって、嫁入りできない身体になっても知らない。——ま、それも心音の自由だけ」

「う、ううう」

「最近の子供は留まるところを知らないそうよ……。知ってる？ 以前起こった学生の殺人事件。事件であって事故じゃないのがポイントよね。彼らにとっては殺意なんて無いから、一思いに殺してくれないんだって。口の中に手をいれてライターに火をつけて、気絶するまで何秒持つかなんてのは初歩の初歩。中に入れるっていうなら、何も穴は口だけじゃないものね。灰皿代わりに使われたりとか、想像するだけでも肝を冷やすわ。そんな思いはしたくないものね。」

「そうした目にあつた後は、助かっても二度と使い物にならなくて、そのまま精神病院に入ることもあるそうよ。——あら、これじゃ結局助かってないわね」

「……っ！」

ぶるぶると震えている。

……少し脅しすぎたか？

一瞬そう思ったが、やはりどうでもいいことだとはつきり捨てた。

「ま、興味本位もいいけど、そういうリスクも把握しておきなさい。何か事があつてからは遅いでしょう？」

「あ、で、でも！ それだとアルちゃんも一人暮らししてて危ないじゃない！」

先ほどバツ印をつけた地図を手に、詰め寄ってきた。

「こんなひと気の無いところふらふらしてるなんて。しかもすごい可愛いし、そっちの方がずっと危険だよ……うう。アルちゃん、あたしが無理を言つたばかりに……助けられなくてごめんね……」

心音は半泣きになっている。

頭の中でどんな想像されているのか、考えたくもない。

「……ほんとにバカなのか愚かなのか天然なのか、わからないわね」

「ひ、ひどい」

「先ほどの大げさにしても、心音は隙だらけなんだから少しくらい気をつけなさい。自

宅とはいえ客を迎える格好ではないでしょう」

「わひゃあっ!!」

目の前でぶらぶらしている胸元のモノを、強く握ってやる。

両手で押さえてのけぞった隙に、ホットパンツの裾に指を引っ掛けた。そのまま軽く後ろに押しやる。

「わ、わ、わ」

元々バランスを崩していた所を押され、抵抗むなく転がってしまふ。

しかも引っ掛けられた指はそのままがつちりと食い込んで離さず、転んだ勢いで膝の辺りまで下着ごと脱げてしまった。

「い、いたた……」

「映像に残して、悠斗に売りつけてやりたい姿ね」

「わ、わ……っつ！ やめて！ やめてっ！ まだ綺麗な体でいたいっ！」

携帯を向けてやると、腕をぶんぶん振り回しながら、部屋の隅に逃げていく。

「そこそと音がするところから察するに、服の隙間から下着を通して身に着けているのだらう。」

まったく……と嘆息しつつ、先ほど心音が手に持っていた地図を拾い上げた。

そこには長浜研究学園都市の俯瞰図が縮小コピーされており、幾つかの場所に注釈がつけられている。

アルが除き、残った場所には幾つか共通項がある。

旧桜丘技研のような、潰れた研究施設や病院施設が中心だ。ここ、長浜のような場所では土地の色に合わせて移転してきたものの、成果が出せずに潰れ、再度移転し、併合されたようなものがいくつもある。

もちろん、それらは研究所の数からすれば決して多くはないが、他の都市に比べると飛びぬけている。そもそも、絶対数が違うのだ。

そして、中には敷地や建物が手付かず放置されている例も、少なくはない。

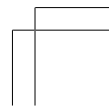
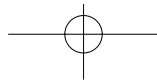
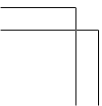
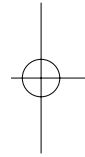
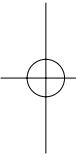
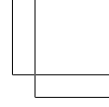
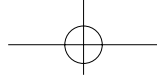
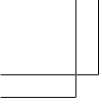
そのうちの一つが気に掛かった。

「この長浜記念病院跡って何？」

今度はTシャツにミニスカート姿の心音がやってくる。

さっきの騒動も忘れていたようだ。

こういう、心音の立ち直りの速さはアルは気にいっている。何度からかっても拗ねたりしないから飽きがこないし、あの同じ外見の少女のように、すぐ腕力にも訴えてこない。「昔で来た所で、すごい大層な名前付けたけど院内感染がおこって酷い目にあったり、お



医者さんが手術の最中に倒れたりして、呪われてるって噂があるところ」  
「具体的には？」

「ん？」

「取り潰しの理由はそれでいいとして、今も建物が残って噂になるくらいだから、何か  
起こったりしてるでしょう？ そちらはどうなの？」

「さあ。ただ、入院服みたいな格好の女の子を見かけたり、耳元で声が聞こえたり」

「そう……」

「だから調べようと思ってたのにく。アルちゃんがあんなこと言うからあ」

訂正。立ち直ったわけではないようだ。

半泣きになってる心音に、地図を手渡した。

「たまにはこういうのも良さそうね。用件が済んだら行ってみましょうか」

§

「それで？」

「清川が戻ってくるのを待って、心音を連れて行って来たわよ？ すっかり暗くなって夜

の九時くらいになっていたけど」

「……鬼だ」

幾ら相手が心音だからって、そこまでするのは酷だ。

「行ってみると現金なもので、最初はカメラ片手に撮りまくってたわね」

「最初は？」

「途中からだんだん元気なくなってきた……音が聞こえろとか、何か居た！ とか言い出すし。まったく、妄想も困ったものだわ」

「………おいおい」

「トイレに行くというので、中に入ってる間に離れて別行動してみたのだけど——」

「さて」

ストップと、アルの前に手の平を突き出す。

「夜の廃墟のトイレに置いてったのか？ 心音を？」

「ええ。待ってるのも時間の無駄だわ。私の可聴範囲に人の音は無かったから。………何か問題が？」

「……いやもういいよ。いろんな意味で相変わらずだな」

流石にこれには心音も参っただろう。

普段から賑やかでよくトラブルを起こす後輩だが、これはいくらなんでも可哀想だ。真央あたりなら、その場で泣き出してしまいかもしれない。

「でも元気なものだったわよ？」 声は掛けておいたし、元々一人でも来るような神経した人を、ほんの少し弱ったからといって、今さら氣遣っても無意味でしょう。トイレから出た後も、一人で歩いてみたいだし」

マジか……根性ありすぎるぞ。心音。

「なんだか賑やかだったわね。電気無いのにテレビついた、とか、なんだか人影が、とかそれはもうやかましい限り。元気になってよかったわ」

それは元気とは違う気がする。

「それに、アレなら本物が居ても逃げるでしょうね。仮に本当に実体を失っても存在できるなら、好き好んでやかましい人には近づかないでしょう」

確かに静かなところに出るってイメージはあるな。

それにしてもやるな……心音。

彼女の漢度を少し上方修正しておこう。

「でも判らないな。心音は楽しんでもみたいけど、アルがそんな所付き合うなんて理由無いだろ」

「そうでもないわよ。私の目当ては薬品室だから」  
「薬品？」

「ええ。ストックがなくなってきたから、ダメで元々で行って見たの。潰れた建物なんて中の物が手付かずでも珍しくないから」

「そうなのか？」

「ネットで廃墟について掲載してる。ページでも見てみたら？ 全部が全部几帳面に管理されてるわけじゃないわよ。メスや手術道具が放置されてる所も珍しくないから」

「……一体どこでネット使ってるんだ。お前は」

もう、アルの持つ資金やら技術、環境は気にしない方がいいのかもしれない。間違いないくうちよりブルジョワジーな生活をしている。

「幸運にも薬品庫は手付かずだった……と思っただけ……何かおかしいのよね。棚に綺麗に並べられていたんだけど、幾つか抜けがあったの。硝酸は残ってたからいいとしても、ホウ酸なんて誰が持ち出したのかと思って」

「ホウ酸？ よく害虫駆除に使ってるアレか」

「そう。殺鼠や野犬なんかにも使われるわね。見つけても素手で触らない方がいいわよ。粘膜につくと厄介なことになるから。ほかにはろくな物がなかったけど」



材料になりそうなナトリウムとか。なんて、ぼそつと聞こえた気がする。  
何の材料だ！ と突っ込みたい気持ちは抑える。あまり聞かないほうがいい。

「……そんなの何に使うんだろうな？」

「さてね。案外つまらない使い方かもしれないわよ」

「つまらないって、何か心当たりが？」

「さあ。もしかしたら、そうなのかもしれないってだけ。……あ、そうだ。清川が何故出かけていったか、言わなかったかしら？」

「聞いてないな。何かあったのか」

「いえ。単に夏休みでハメを外した男子学生が一人、林の中で見つかったそうよ。車の中で、下半身丸出しの情けない姿で、意識を失って痙攣していたとか」

「なんだそれ」

「車はどうやら親の物。無免許でナンパか何かをしては、人の居ないところに連れ込んでいたようね。引っ掛かる方も問題あるけど、バカの末路としか言えないわ」

それで、どうみても車内自殺か刑事事件に見えるような事態に、土地の管理者である心音のお爺さんが呼ばれたらしい。

その男子は即日入院。原因は聞いておらず、興味もないので調べなかったらしい。

「……それで、その話がどう繋がるんだ？」

「ふふん」

お代わり、と再びグラスを渡してくる。

そちらは流しに出して、新しいグラスを出した。

今度は今までもよりもミルクを多く入れた。

「今までの私の話には、一つずつ嘘と伏せてる内容がある。悠斗はそれを当ててみて」

「はあっ!」

「暇だったんでしょ？ 少しは付き合いなさい」

「まったく……」

とはいえやる事なくて暇を持て余していたのも事実だ。

あれから客も来ないし、注文はアルがするだけ。表には通る人影もなし。

……ま、少し付き合うくらいならいいか。

「わざわざ話に出すくらいだから、病院とそのナンパ事件は関係あるんだよな」

「ノーヒント」

「む」

つまり、その辺りの前後関係も話すとヒントになるってことなのだろうか。

推理とかじゃなく、アルの嘘と話してない内容を当てるといふ問題だ。だとするなら……この話で足りないものはなんだろう？ それでアルが話してない事になりそうだ。「二つの話の繋がりがわからないな。そこが意図的に省かれてる……気がする」「それで？ 一つはそこで決定？」

「……ちよつとまった」

嘘があるというのもポイントだ。

繋がりが悪いからといって、片方のエピソードが嘘だったら繋がりが悪いことは矛盾にならない。

「というか、これアルにとっても有利な問題だよな」

「バカね、そんなのあたりまえじゃない。勝てる勝負を一方的に仕掛けるのが楽しいのよ」ものすごいワガママ理論を当然とばかりに言ってくる。

挑発的な目が、ホントに判らないのかと問いている。

「わかった。もう少し時間をくれ」

「好きにきなさい。あ——チョコサンデー追加ね」

「どんだけ食うんだよ……」

この姉妹はさすがだと納得しつつ作りにいく。

その間に、もう一度考えてみることにした。

「多分、嘘は話の繋がりのことだ」

「というと？」

「後半の病院の話は、心音の部屋の後に行ったようにしか取れないけど、実際は違うんじゃないか？ いや、それだと言ったというのと二重になるから、最初の話で名前の出ている長浜記念病院に行ったと思わせる会話の繋ぎの部分が嘘だ」

「どうしてそう思ったの？」

「……とりあえず、正解かどうか教えてくれ」

「じゃ、正解」

やっぱりか。

違和感あつたのは、いくらなんでも心音に対する扱い酷いんじゃないか？ と思ったことだ。

基本的に人と距離を置くアルが、そこまで激しい突っ込みするには、何らかの理由がありそうだ。

それが後半と前後が逆なら、何となく理由はわかる。  
無駄足踏まされて、それで心音が全然懲りてなくてノリノリだったから、少し意地悪したんだろう。ついでに、そこまでやったくせにその後付き合っただけあげるあたりも、やはりアルだ。

「それで、もう一つは？」

「話してない事か……それがさっぱり判らないんだよな」

というより、想像の余地がありすぎて特定しきれない。

実際にはどこに行ったのか、もしくは二つのエピソードを繋ぐ、車内で倒れていたという男子の話。さらには心音のお爺さんが呼び出された何かで、また会ったのかもしれない。こちらは完全に想像するしかない。

「ふふん。もう一つはね……」

と言って、ちらりと視線を後ろに流す。

そこには先ほどからいる学生連中の席がある。……何故だか、こちらを——というか、アルを見ている。

彼女達はとも目を引くルックスをしているから、その気持ちはわからないでもない。静かな店内だから、こちらの話が聞こえてしまうというのも、まああるだろう。

だとしても、なんだか過剰に反応されてるような……。

「その馬鹿な学生のことを調べたっていうのが、伏せていた内容。……ま、長い休みでちよっと調子に乗った連中みたいで、入院した男が主犯で車を使って集団でナンパしていたみたいよ。ターゲットを見つけると、帰宅間際を狙うなんていうのは常道手段ね。ここまできると、少々しつこすぎるんじゃないかしら」

「……夏場で羽目を外す奴ってのはよく聞くけど」  
それは確かに酷い。

「そのリーダー格の少年には当時彼女がいたらしい。……まあ、よくある男女のもつれてやつ？　ただ報復は酷かったみたいだし、案外その彼女とやらも同じ手口で手に入れていたのかもね」

「それが、さっきのアレか」

「そうじゃないの？　硫酸とは違い健康な皮膚を溶かすほどの強さはないけど、傷口や薄い粘膜に触れることで炎症や中毒症状を起こす。男で一番弱い部位に擦り付けられた、まさしく地獄でしょうね。しかもやるほうは気をつけていれば素手でも出来るし」

そこで、再びちらりと背後に視線を送る。

アルと一瞬目があい、彼らのうちの何人かがすくみあがった。

「触れる対象により一方だけが被害にあう——こんな形でも怨霊なんて作れるのね」

「……お前、よくそんなこと調べたな」

「ま、その仲良しグループ全員のデータもあるからね。今すぐ出すとこ出せるけど——」  
片手にしつしと犬を掃うような仕草をする。

後ろの連中が、テーブルの上にお金をおいて、そそくさと立ち上がった。

「……はあ」

「ま、お灸くらいにはなるでしょう。鈴には借りがあるし」

「まったく……自分がターゲットになったらどうするんだよ。強いのは知ってるけどさ」  
「足手まといが居ないなら、長距離からスナイプされない限り負けないわよ。むしろそちらの方が好都合」

そんなことを言っつて、不敵に笑う。

「でも、わざわざ鈴さんのために調べたのか？」

「ん？」

意外な義理堅さに感心したのだが、違うと首を振った。

「この街で起こった事件なら、どんな些細なことでもやるわよ。何が自分に繋がるかわからないでしょ？ ほら、今って情報化時代だから」

なんて微妙にずれた発言で締めくくった。

「それじゃ」

「ごちそうさまと言って、アルが立ち上がる。

彼女の後を追うようにレジへ向かった。

アルはお釣りもでないようにきっちり支払うと、日傘を手にした。

春先は帽子で隠していた長い髪を、今はそれで代用しているようだ。

もう一つ思い出したことがあって、呼び止めた。

「そういや、さっきのプラスチックってなんだ？」

「心音がテレビがどうか言ってたじゃない。帰り際に私も見に行ったんだけど、これが全然映らないし、コンセントも刺さっていないしで、本当に肩透かしだったのよ」

「それは……ホラーだな」

「だから頭きて、持って帰って解体して中の構造調べてしまったわ。何も特別なことなんてなかったし、本当に無駄な時間すごした」

まったく、人に無駄なことさせて……なんて言いながら外に出た。ついでに店の前まで



見送る。

クソ暑い炎天下を、僅かな鈍りさえも見せず、悠々と歩いていった。  
その背を見ながら思わずこぼれた。

「……怖いのはアルのほうだった」

それが聞こえたのかどうか、びたりと彼女は足を止めた。

不敵に笑って、一言。

「心音の写真、いる？」

「いらない。可哀想だから消してやって」

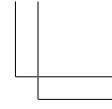
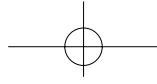
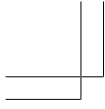
「ふふ。それじゃね」

後手に携帯をくるくると振って、帰っていく。

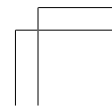
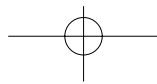
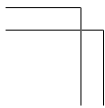
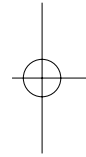
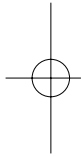
とても暑い夏の午後。

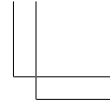
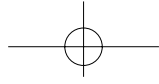
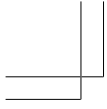
アルが持ちかけた小さなエピソードだ。

他にもユキや真央たちとも色々あったのだが——それはまた、別の話。



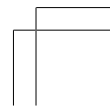
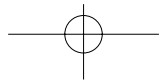
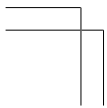
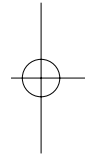
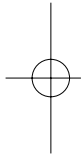
100





101

# Summer Times



## Summer Times

「暑いわ」

リビングで涼んでいる中、唐突にアルが言い出した。  
僕とユキとアル。三者三様にグラスを手に持ち、あまり涼風が出なくなったエアコンの  
前に陣取っている。

「またいきなり……」

先日のベルカッツェを思い出す。

あの時も、いきなりゲームを持ちかけてきた。

「む……」

カランとミルクティーを傾けながら、向かいに座ったユキが険しい視線を向ける。

「暑いわ。何とかしなさい」

リビングで優雅にアイスティーを傾けている。

……これ一杯を飲みだすまでもにも、ひと悶着があった。

ミルクと砂糖を入れるのはお子様だとか、ストレートでは飲めないのか等等……。

この前の喫茶店でミルクと砂糖多めにしてた事は、武士の情けで黙っておく。

「……温度さげようか？」

「すでに最低温度じゃない。壊れてるんじゃないの？」

「だよなあ」

エアコンは今も頑張ってるが、じりじりと室温が上がってきている。

「じゃあ、またベルカッツェにでも」

「連日いつてるもの。飽きたわ」

「即答される。」

「むー……っ」

人様の家で好き勝手言うアルに、ユキの怒りはそろそろクライマックスだ。

「アルの家は？ 僕のところより涼しいんじゃないのか」

「この炎天下の中、外に出ろっていうの？」

「……っ」

キッとユキが怒り混じりの視線を向ける。

がたんと席を立った彼女を、アルが正面からニヤリと笑う。

「へえ。やる気？ こんな場所で物好きね」

「うるさいです」

「ああ……もう……っ！ やるなら外いってくれよ!!」

僕の声に、二人ともピタリと止まる。

「……………」

無言で座りなおした。

……二人とも、暑い所は嫌いらしい。

「あらあら。アルちゃんお代わりはいる？」

「……………」

「ユキちゃんも？」

「ん。なにもいれないで、いいです」

「張り合っちゃって。精神年齢の低いお子様が」

「む……………」

……………お前らな。

お代わりをいれながら、母さんがニコニコと割って入る。

「でも仕方ないわよね。今日は本当に暑いもの」

「だからって、わざわざ人の家でケンカしないで欲しいんだけどなあ……」

「それなら悠斗、泳ぎにでも行ってみたら？」

「泳ぎ？ どこに」

母さんの提案に、アルが首を傾げる。

「この近くなら僕のバイト先だろ。少し離れた所に室内プールがあるから、そこなら——」

「楽しそうです」

「却下」

ユキをさせざるように、一言で切ってすてる。

「……………」

「そんな目で睨んでもダメ。見るからに飾りの頭でも、少しは使って考えなさいよ。そんな目立つことなんてできるわけないでしょ？ 却下よ却下」

「アルの立場からするとそうなんだろうけど……」

「わたし、行きたいです」

「一人で行きなさいよ。そのまま帰ってくるな」

「わたしのうちです！」

参ったなあ……。

ともあれ、この暑さはいかんともしがたい。

泳ぎに行くというのはいい案だと思うが……場所が問題だ。

「……ビニールプールとか」

「殺されたいの？ だいたい、それじゃ屋外じゃない。何のために日頃から日光避けてると思ってるのよ」

「アルちゃん、お肌弱いのか？」

「見ればわかるでしょ、そんなの」

「わたし平気です」

「そりゃあんたは——」

「ぜんぜん平気です」

「……解体すわよ。このガキ」

この辺りは二人の身体特性の差か。

「何とかならないかなあ……」

「プライベートのプールでも用意できないの？ そうしたら入ってあげるわ」  
「ゆうと、二人でいきましょう。この人、おいていきましょう」



「……そうは言ってもな」  
「思わず母さんと目を合わせる。」  
「……じゃあ、こうしましょうか」  
「そう言っていたらっほくほほ笑んだ。」

§

「うちの学園の？ ああ、でもでも！ あたし、もう卒業しちゃってますよ？」  
「電話口の心音がいぶかしげだ。」  
「心音の方から、お爺さんに許可取って欲しいんだよ。夜にプール貸して欲しいって」  
「おおっ。なるほどー。みんなが寝静まった後のプール！ そこに無断進入して好き勝手に泳ぎ回る快感！！ 夜な夜な騒ぐ音が七不思議として語り継がれて——」  
「……いや、だから」  
「あ、許可のことですね。大丈夫ですよ。ダメでもあたしから勝手に都合つけちゃいます」  
「暴走するくせに、話は聞いてるんだよな。お前」  
「いやだなー。心音ちゃんは人様のお話をよく聞く子だといいいねと、近所のお姉ちゃんか

「私も大人気ですよ」

「もはや突っ込む気力もない。」

「……じゃあ、夜7時くらいにいいか？」

「はい。わかりましたー。水着は何にしよっかなー。ビキニかなー紐かなーはずかしいなー」

電話が切れる。

「……またアルに泣かされなきゃいいんだけどな。」

「そういうわけで人目につかないプールを確保できたけど」

「悠斗って馬鹿？」

「む」

呆れたように言われる。

「今暑いのに、夜まで待ったら意味ないじゃないの」

「あなたうるさいです」

ユキがムスっとしている。

「かっつてなことばかり言ってます。ゆうと、いじめてます。自分勝手です」  
「ユキ……」

じーん……。

あのユキがここまで……。

「……馬鹿らし。アンタが言えた義理じゃないでしょうが」

言いながらアルが立ち上がる。

「おい、アル」

「よくよく考えれば、私も暑さに判断を鈍らせていたよね。まったく馬鹿と同レベルの馬鹿になるなんて」

「……？」

「隣、行けばいいじゃない。何もエアコンあるのここだけじゃないものね」

ぞろぞろと連れだつて真央の家に向かってくる。

母さんはいつものようにノンビリと、真央ちゃんによろしくねなんて言っていた。

その真央だが、なんだか少し疲れた雰囲気を感じさせている。

この所、連日夏の課題で大変らしい。

「それでうちなんだ……」

「そーゆーこと。悪いな課題中に」

「ううん。別にいいよ。でもごめんね。ちょっと忙しくて手が離せないの」

「別にいいって。押し掛けてきたのこっちだし」

「ふうん……見せない」

アルが無造作に入っていく。

「あ！ アルちゃんっ」

「課題なら終わったわ。これで気兼ねなく涼めるわね」

「……うう」

「三十分ほどして、二人が下に降りてくる。」

真央は複雑そうだ。

「課題……本当にあっさり……わたし、ずっと悩んだのに……うう。というか、課題  
チエックの時どうしよう……」

真央がショックを受けている。

「夜まで居させてもらうわ。あなたたちは好きにしていなさい」

「わたしの家だよ」

もちろん、アルにそんな一般常識は通じない。

アイステイーを傾けながら、一人でエアコンの風が当たる場所を占領している。

「もしかして、アルって暑さに弱いのか？」

「なによいきなり」

「ベルカッツェによく涼みに来てるみたいだし、今だってエアコンにめちやくちや拘ってた<sub>ら</sub>だろ？」

「別にそこまでこだわっていたわけでも」

「……いや、こだわってた<sub>ら</sub>だろ。ものすごく。」

「なんじゃく<sub>な</sub>証拠です。きたえ方がたりません」

ふふんとユキが得意げに胸を張る。

「別に。体質的にはむしろ強いけど。……この不快感が嫌いな<sub>の</sub>よ」

「……ああ、湿気か」

髪の毛の長い彼女達では、肌<sub>に</sub>張り付いて大変そう<sub>だ</sub>。

真央が持ってきた麦茶を飲みながらも、ワンピースの姿の白い少女二人は対照的<sub>だ</sub>。

「でも、アルちゃんってなんでそんなにプール嫌いな<sub>の</sub>？」

「いまさらその話？ 確認するまでもないでしょう。私は人目につきたくない<sub>の</sub>」

アルは呆れて言うが……その態度には、どこか話を変えたいような節が見える。

「……………」

その双子のような姿を、ユキが挑むように見つめている。

「ゆうと、まお」

「……………」

何かを察して激昂しかける。

そこに割り込むように、ユキが続けた。

「わたし、泳いだことありません。泳ぎかた、しりません」

「ぐ——っ！」

アルがのけぞる。

今のが致命的だったらしい。

「もしかしてアルって……………」

「うるさいっ」

「……………。ほお〜」

「見るな。話しかけるな」

真央がアルの手を取って、ぶんぶんと上下に振る。

「アルちゃん、お仲間ー」

「離さないっ」

真央の手を振りほどき、リビングを出ていく。

「おかしいことじゃないだろ。誰も笑ったりしないぞ」

「別に、笑われることなんか、一つも……」

「ゆうと、泳ぎを教えてください」

「この——っ！」

ユキが僕の後ろに回り込む。

顔だけ覗かせて、アルをむっつと威嚇してる。

「でもさ、泳いだことないっていうのは本当に恥ずかしいことじゃないだろ？ アルの今までからすると仕方ないっていうか、そういう施設に行く機会もなかっただろうし」

「……そうだけどね」

「それじゃあ練習するいいチャンスじゃない？ 泳げて損することないもんね」

「……お前泳げないだろ」

「う……それは言わない約束だよ」

「む——……」

アルが来ることに、ユキは不満気な表情を崩さないが……。

「ん。わたし頑張りますっ。あの人より、ぜったい上手くなってみせますっ！」  
闘志を燃やしていた。

§

「ははあ。それであんなにやる気になってるんですね」

照明で照らし出された夜のプール。

もしここが屋外だったら、さぞかし見ごたえのある光景になっていただろうに、残念ながら屋内だ。

「でも悪いな。こんな事のために都合つけてもらって」

「いえいえ、ゼーんぜんオッケイですよ。あたしだって、よく泳ぎに来ますからね。それに先輩方には利用料金貰ってますし」

「……全然足りないけど」

本当に一般利用者程度の額だ。

プールの貸し切りには足元にすら届かない。

「わー。ユキちゃん上手い上手いっ」



離れた所から真央の歓声と、凄まじい勢いで掻き分ける水柱が立っている。さすがに身体能力においてユキに欠点はない。

ビート板にはもう慣れたようで、ものすごい速さでプールを往復している。

「それで……アルちゃんは一体どこに？」

「母さんが着替えさせてるはずなただけだなあ」

もしかして、素肌を晒すのが嫌なんだろうか。

……ありそうだ。

ユキをよく、羞恥心がない！ となじってケンカになっている。

確かにユキはその辺り大雑把だ。対するアルは着こなしまでキッチリしている。

「みんな、お待たせ」

「あ、優子さんっ！」

更衣室から母さんがやってくる。

アルの白い髪が、その後ろにゆれている。

そして、歩くたびにやらカチャカチャと音が……。

「……………」

「……………おいおい」

心音と二人で思わず顔を見合わせた。

アルの白い肌を覆うのは、露出の多い白い水着。

しかし、その白い両の太ももには見慣れない物がくっ付いている。

「……銃刀法違反」

「それは人間にだけ適応される法ね」

……一つ思ったんだが。

アルが泳げないので、あんなに何本もナイフを差してるからじゃないだろうか……。

「……………」

じろり、とプールで向かい合ったままこちらを威嚇している。

その横をユキがものすごい速さでバタ足で通り抜けていく。

「ユキちゃんっ！ 息継ぎ！ 息継ぎ！ 息つきーっ！」

2.5 M程度じゃ、その必要すら無いらしい。

あっさりとは自然に泳ぎを体得したらしいユキの横で、ビート板片手のアルは頬をびくびくと引きつらせている。

「……どうして、この私が、こんなゴミみたいなモノを、使わないと、いけないのかしら……」

「ユキもさつきまでそれ使ってたんだぞ」

「く……」

しづしづと言った調子で体を預け、何とか水をかこうとするが……。

「……ふくふくふく」

……早速沈んでいる。

「お、おいっ！」

慌てて水の中に潜って引つ張り上げる。

「げほっ、げほっ。やっぱり泳ぎなんて……」

「……」一時的にナイフ外したら？ 明らかに重さに負けてるだろ」

「出来るわけないでしょう……っ！ 理由があつて持ち歩いてるのだから、例外を作つてどうするのよ」

「そーですよ。かの劍豪、宮本武蔵だつて隙を作りたくない！ って理由でお風呂も絶対に入らなかつたそーですよ。不潔ですな」

「お前は感心してるのか、バカにしてるのかどっちなんだよ」

「まーまー。それはおいといて、アルちゃんとしては武装したまま泳ぎたいわけだよね」

「……そうね」

「じゃあ、こうしよつか」

そう言つて、心音が更衣室に消えていく。

「優子さん。ついにアレの出番が来ましたよーっ！」

「あらあら」

そして母さんまでのんびりと消えていく。

……何を留意したんだ、一体。

「ところで優子って今いくつ？」

「……さあ、多分40手前のはずだけど」

越えてるかもしれないが、その前後のはずだ。

「ありえないでしょう。どうみても悠斗と同年代ね。案外メルクリウスなんじゃないの？」

「………実は最近、それも否定できなくなってきた。僕の方がたまに年上に見られるんだよ」

更衣室に消えた二人は、5分くらいして戻ってきた。

その手にしたものを見て、アルが暴れる。  
……浮き輪とイルカのフロートだった。

「ど、どうしてこの私が……屈辱だわ……」

ざぶざぶとフロートにまたがったアルを引っ張っていく。  
「じー……」

その光景をユキが羨ましそうに見ている。

もう彼女はクロールもマスターしたようで、はっきり言って僕より泳げる。

「どうかそのナイフ、合計何本あるんだよ」

アルには悪いが非常に重い。重すぎる。

引っ張るだけでも精一杯で、フロートはビート板を重ねても沈みそうになっている。

彼女が絶妙なバランス感覚で平然と乗りこなしているから引っ張れるだけであって、本来なら1メートルとも進まない。

この辺り、やはりアルの身体スペックも普通じゃない。

「フォールディングナイフにシースナイフ。登山ナイフにサバイバルナイフ。後はファイティングナイフを2本……これでもかなり選別したのよ」

「……例えば？」

「普段使っているD2鋼は耐熱性の変わりに錆に弱いから、当然除外したわ。炭素鋼全般が使えないから、殆どがステンレスナイフ」

「包丁とかの？」

「銀紙鋼は加工するの面倒だから滅多に使わないわ。とりあえず今日はA T S 1 3 4で統一したから、帰ってから実際の対腐食や耐水性を検分してみるつもり」

「さっぱりわからん」

「……まあ、質問だけに答えるなら6本ね」

「一体どこにそれだけ持っているのやら。」

「合計重量は？」

「2キロくらいかしら。大して重くないわ」

「それじゃ鉄アレイ持って泳いでるようなもんだ。」

「泳ぎの初心者がそれじゃ、水には浮くまい。」

「悠斗、いいからしっかり引っ張りなさい。全然動かないじゃない」

「……前からじゃなあ。後ろから押していいか？」

「な——ダメよ。前から引きなさい」

この手のフロートを進ませるなら、後ろからバタ足で押した方がはやい。だというのに、アルは頑として後ろには回らせない。やはり、武器の近くに他人をおきたくないんだらうか。

「……ゆうと、ゆうと」

ユキが流れるような自然な平泳ぎでやってくる。

「すごいな。もうそんな泳げるようになったのか」

「ん。がんばりました」

頭を撫でると気持ち良さそうに目を細める。

「……ふふん」

そして、よせばいいのにアルに向けて小さな胸を張って自慢する。

「く……っ」

ギリギリとアルの眼が釣りあがる。

「ああ、もうっ」

ホント仲が悪いな！

両者の距離が縮まっていく。

「一触即発の気配——に、のんびりと浮き輪の心音が割って入ってきた。」

「もー。ダメですよーっ。プールは綺麗に使わないと。お水汚したら全交換なんですからね」

「……心音ちゃん、そういう判断なんだ」

「そういうわけで……えいっ！」

「なっ」

アルのフロートに飛び掛る、浮き輪のまま、後ろからバタバタと押していく。

「わー、アルちゃんってお尻まで肌白くてきれー。いいなー。触ってみたいなー」

「や、やめなさい！ ぶっころすわよっ」

「はーい、やめときまーす」

ぼしゃばしゃと二人して仲良くプールの中を回り始める。

……そうか、そういうことか。

「……まあ、あつちは暫く心音に任せておけばいいとして」

母さんはプールサイドでのんびりと中を眺めている。

元は保険の先生だし、何かあっても何とかしてくれるだろう。

「じゃあユキ。次はこっちの特訓だな」

「ん。がんばります」



「え、え……？ わ、わたしはいいよっつ！」  
真央の嫌そうな声が響き渡った。

……そうして、皆でプールを満喫した帰り道。

「それじゃ先輩がたー。おつかれさまでしたー！」

心音が元氣よく手を振って、かけていく。

ユキは泳ぎ疲れたのか、すやすやと僕の背で眠っている。

そして結局、なんだかんだといってアルも泳げるようになっていく。

元の身体スペックは非常に高い。

水の中に慣れた後は、立ち泳ぎで歩くように移動していた。

「当然の結末だけだ」

「……そう言うことしておくよ」

そうして公園を抜ける間際、アルが踏みとどまった。

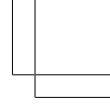
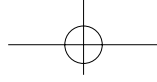
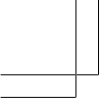
「今日は帰るわ。ナイフの手入れもしたいし」

「ええ。それじゃまた明日ね」

「……行くなんて一言も言っていないけど」

ニコニコと押し強い母さんにため息をついて、僕達にぎこちなく苦笑してみせた。  
「ま、水も結構悪いものじゃないわね。真央も早く泳ぎくらい覚えなさい」  
「うううアルちゃん意地悪だよー」  
それだけを言つて、暗闇に消えていった。

ある夏休みの一日。  
穏やかに、平凡に過ぎていく、真夏の太陽を思わせる宝石のような一日だった。



後書き

こんにちは、桐月です。お手に取っていただきありがとうございます。今回はあつぶりけ本で文庫本を作ることができました。

新規書き下ろし短編が一本と、過去に出したコピー本から二本。ページ数もギリギリになつてしまいましたが、何とか規定内に収めることができました。

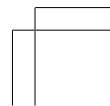
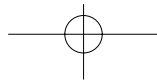
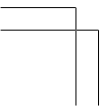
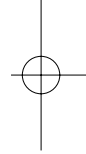
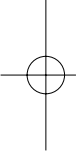
これらは追加ルートやイベント、本編の補完などは考えず、あくまで本編のIFの物語として楽しんでいただければ幸いです。

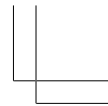
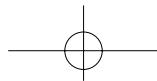
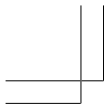
また次回があるかどうか分かりませんが、気の向くままに筆を重ねて行こうと思います。

それでは失礼します。

楽しんでいただけましたら幸いです。

12月30日 桐月





126

## Winter Episode

2008年 12月30日初版発行

発行者：桐月

発行元：桐文堂

[http://misawahanei.cool.ne.jp/  
kiduki/](http://misawahanei.cool.ne.jp/kiduki/)

印刷：パワープリント

表紙：オダワラハコネ

本作の無断転載、使用は禁止いたします。

